

吾人は斯く思惟す

啄 人 生

我々は現代宗教に對して率直なる思想をのべたい。如實に知見した感想に就て嚴密なる批判は扱ておき現代宗勢が此の如き状態にあるといふ概念を把握して我々は我々の認識圈内に於ける提示を試みやうとするものである。社會的に其の宗教問題を見るに、宗教の指導性を忘失して如何に時代に追隨し若しくは適應せんかの苦慮は、已に周知の事實と言はねばならない。

我々は社會といふ大きな奔流を充分に検討し理性批判を加味して破邪顯正の法を以て指導せねばならない。我々がかゝる使命の下に思惟し活動し、往昔の日蓮を見倣ふて其の生活水準をより意義的に開拓したならば理想とする佛國土の實現は可能なると思ふ。

然るに現今宗教界特に現教團に於ける其の退廢振りは筆舌の範圍外なり。其の綜括的立場にある人物は到底我々の畏敬し渴仰するだけの價值を認めず多くそれ等の人物は敏腕家なる事を代表語とせらるべきもの多數なり。我々は久成の佛を信じ、神の絶對性と普遍性と超人的なる事を認む。然し其の信仰の一片は人間崇拜の現象を免れず、我々は宗教的人物の一舉手一投足は能く其の範ともなすなり。然るに其の價値的人物は暁天の星よりもまれにして求めんとすれども獨居默住、我々は憂惱する

ものなり。一人の潮腕家の登場は下層寺院に於ける弱者の多數を必要せり。優者はかゝる弱者ありて存在する、故に弱者は優者、強者の手段として存在の意義を見出す如き感痛切なり。我々は此所に彼の虚無哲學者ニーチエの思想の一端を見るべきなり青年の眞摯なる叫びも、宗教的乃至學問の懊惱も、純粹宗學の理念の發展も正義の訴訟も皆之文字として、個人として、空氣の音聲電波として、其の結果は空寂に歸するなり。我々の憤思なる愛法護持者の言は正しく一片の煙霧となつて虚空に消滅するのみ。それはかゝる地盤に宗門行政の權威者を非人格的なる人を以て在らしむるの誤謬より出發するものなり。我々は此の根本解決をなさずんば如何なる努力も水泡に歸するなり。我々は其の人物の思惟と行動が法の如く教の如く、如々の言行者を希望し、我々の思想と行動との阻害者、中傷者たるべきものを速斷に除外すべきが急務たり。

かゝる行政的教團は弱肉強食なるを以て要たり。中流寺院の經濟的安心觀は伽藍増築、信徒取聚を以て本務となし、毫も宗教的情操の啓發をなさざるなり。新興類似宗教の隆盛は一つは我々に冥醒と刺戟の針なりと言ふべきに、教團人は傳統ある既成宗教を誇耀して、其の發展経路の跡を見ざるなり。かゝる教團人は類似宗教の如何に社會的に布教要素を内包しおるかといふ方法を思考せず徒らに彼等を非難攻撃して得々たるは、又何と無頓着なる單純なる頭腦なる事だらう。如何に新興宗教、はたまた邪教と言ひ、淺薄なる教義といひ一言にて嘲笑的態度を

取るは早急なる蒙昧者と見るべきなり。我々は知性を持つて彼の一長一短を解剖して學ぶだけの雅量欲するものである。

既成宗教が固定化した寺院組織と、教義内容を持つて時代趨勢の馳驅に指導せむとも適應せんとするは努力は實に、去曆昨

食よりも無爲なる努力といはねばならない。我々が最も憂へ悲しみ、且つ慨嘆に價する事柄はかゝる時代に無自覺な宗教家の特に中層部に於ける法燈者の認識なり。まして一人者の地位にある無覺醒さは、闇夜炬火なきよりは更に渡りに船なきに、徒らに彼岸を憧憬するに似たり。

教團人は須くかゝる僻見を是正して、教義内容の固定化には新鮮なる時代の洗除をなし。癡せる人格者の淘汰をはかるべきなり。

現代社會は超世本位の思想より、漸時現世本位の傾向なり。唯物思想の實踐的論、化學的世界觀の成立、感情を主體とする文學の化學化、之等は宗教方面に於て神本主義より人本主義と進行せり、彌陀大日の住む念佛思想は疎遠せられ、凡て現世的に、即身的に、人本的に發達を見たるものなり。故に宗教問題に於ても問題は動搖を招き宗教自體の否定か改造か、之等の二點の歸着は或は唯物思想の前者を取る傾向等となりて、疑問視野の擴大は其の範圍は益々廣範に展出してゆけり。又教義内容を學問の進行にもなつて其の研究的態度は顯著にして、異宗教にありても其の最善なる内容は割除して、自己宗教の所説をなし、此の原理は我が教法に説誦しあるなり。彼の教義は盜見

なり等と稱してゐる者こそ、實に哀憐に似し見解なり。アカデミックな研究方法は已に時代の落伍者なり。梵本は漢譯に漢譯和本は更に洋本に、然して各國語譯に其の發達の遅たるは、今幾世紀の遅しを見るものあり。

マホメットに於けるハルクの意義等に於ては現宗團人が眠れる夢中に、衣類の交換にも似し、教義の逆作用を將來するものなり。

釋迦の所説特に法華經にありては至深最高宇宙の理法たり。此の眞善美なる宗教的權威の教義的内容を持てるは、我々の誇りともなり、又幸福たるなり。文底秘沈の法門は順く廣開、開會して堂々流布すべきなり。何時迄もかゝる言を持つて固執するに非ず、正法流布のためには邪法と戰鬥を宣告し正しい信念を持つて勇敢に、徹頭徹尾必勝を期するものなり。かゝる覺醒こそ、言を俟たず自己自覺によつて宜くするを要となすなり。

我々は此所に教團の知性人を見るなり彼等の大半以上が理に走つて事の等閑視するを明かに知見するなり。或る人の如き宗教問題を列記し其の所論實に鮮明にして首肯するなれど、彼の人物の心性を再検討すれば、其の言恰も無利有害なり。稱して二重人格者といふ。其の態度は哲人の如く其の眼光は人を射る如き炯々さを具備すれど、其の人の行動たるや以て問題視するに困難なる感あり。然れば言はざればかゝる批判的な觀察なけれども、言ふが故に其の行動と言語との比較を見て前者の方の遙かに重量なきを見るなり。かゝるバランスなき人は自己の言

によつて自己が救はれ、然して化他時に普遍すること肝要なれど、さにあらず前述の如き傾向なり。かゝる現象は罪人が教誡師を説教するにも似たり。吾々の尊敬する人物はかゝる者に非ず。法華經的情念の下に且夕を思惟活動する人こそ欲すれ吾々は此所に社會的宗教を提示するなり。我々教團人の理想は佛國土の實現、本門戒壇の建立にあり。基督教に於ける神の國の顯現、之等の理想は社會進化的にして其の主旨は慈悲、博愛等の統一の宗教の建立を期とせり。

日蓮の教判釋に於ける根本思想は

- 知レ教 (宗教哲理的研究)
- 知レ機 (個人應化的研究)
- 知レ時 (時代應化的研究)
- 知レ國 (國性應化的研究)
- 知レ序 (宗教進化的研究)

かゝる知判に於て前四判は后一判に其の意義の總括たるものなり。此の五義に仍つて佛教最高の眞理、末法救済の要法たる壽量品文底の妙法五字を宗教的に建立して三開して三大秘法の内容となすなり。即ち圖解せば

- 本尊 — 壽量本佛 — 本果妙
- 三大秘法 — 一 題目 — 耳口意三業の妙行 — 本因妙
- 戒壇 — 國家的建立 — 本國土妙

要するに日蓮の主義は日本國は道義的建國にして正法を擁護し世界の道法的統一をなすべき天業ある國なるを自覺し皇室と人

民と一同に此の法に歸したる時、勅宣に由りて世界統一の本門戒壇を建立して國家を以て直ちに宗教的團結とし以て、宗教に實際の統一力を有せしめ各國家の道法的中心統一を期するものなり。

吾々は此所に教は教權的正教的、思想は統一的中心的、信仰傾向は現實的實行的、教化の方式的折伏的國家的、目的は世界の攝化、中心人格は心理、説法の教主としては佛陀と顯れ、唱導の師としては日蓮と現じ、戒壇建立の願主として賢王と生れかゝる世界的宗教の傳道者たるべき我々は今此所に私利私慾に走る徒輩を速に蹴放し、王佛冥合の理想を實現すべく、自覺奮起を希望するものである。(十三、十一)。大泉精舎ニテ)

世界と日蓮

村田海仙

「中馬巷に蔽れ骸骨路に充てり、死を招くの輩既に大半を超え之を悲しまざるの族敢て一人も無し。屍を臥せて觀と爲し、尸を並べて橋と作す」とは宗祖御在世當時の有様を説かれた安國論の一説である。之れ正法地に墮ち邪法天下に蔓延せる故にして、されば三災四劫を離出すること能はず、斯様な穢世を現出するに至るのである。

法と國とは体と影の如しと言ふ。かゝる鎌倉時代に於て人心